四　共産主義者同盟の破産は何を意味するか

『本多延嘉著作集』第一巻・掲載

六〇年安保闘争の総括をめぐって三分解した六〇年ブントにたいする革命的批判である。わが同盟の革命党創成の現実的組織戦術を基底において展開された批判は、翌六一年のブントの革命的翼との革命的統一を可能にするものであったのである。

新安保条約をめぐるわが階級闘争の動的な展開、プロレタリア運動の挫折と敗北の現実的過程はいっさいの既成の「左翼」指導部、とりわけ「前衛党」を詐称する日共の日和見主義とその反階級的実体を自己暴露させずにはおかなかった（武井健人編著「安保闘争」参照）。民同―社会民主主義と日共―スターリン主義の規範のもとで苦闘しつづけてきた「下部」の戦闘的労働者たちは、いまや、かれらの既成指導部にむかって深刻な疑問をなげかけ、卒直な批判を口にしつつある。しかも、その革命的翼は、公然あるいは隠然と既成の指導部の組織的・政治的統制から離脱し、新しい革命的プロレタリア党の創成をめざして、いくつかの地方的グループに結集しようとしている。

革命的労働者と全国委員会

プロレタリアートの深部で生まれつつあるこうした変化は、日共の党官僚がいかに弾圧し中傷しようとも、けっしておしとどめることはできないであろう。「アカハタ」は、連日のように「アメ帝の手先―トロツキストを打倒せよ！」とヒステリックにわめきたてている。だが、この反トロ・カンパニアがかんだかくひびけばひびくほど、われわれは、「アカハタ」が各地でつぎつぎと日共中央に反旗をひるがえす「反逆者」についてより多くの紙面をさかざるをえないことを、よく知っているのである。こうした新しい情勢は、全学連の革命的学生運動を主体に「前衛党」をエセ的に代行してきた共産主義者同盟にたいする革命的批判、その分派闘争―分解過程の激化を不可避とし、そしてまた、わが同盟全国委員会の組織戦術のあらたな躍進と展開を自覚させずにはおかないのである。いまや、わが革命的共産主義運動は、その運動の前史を止揚し、革命的プロレタリア党への道をより大胆に追求すべき転換期にさしかかろうとしているのである。

五六年十月のハンガリア・プロレタリアートの反乱の革命的影響のもとに胎動したわが革命的共産主義運動は、当然のこととして、当初は革命的インテリゲンチャによる先駆的な思想的運動から出発した。こうした状況は、政治的未訓練とそこから結果する根強いセクト主義を派生させ、五八

年暮には解体の危機さえもたらしたのであった。だが、このような「内部的未成熟」とたたかいつつ、戦後日本唯物論のもっとも革命的伝統に依拠して展開されたわが先駆的運動は、日共―スターリン主義を根底から転覆しうる批判の武器を鋭くとぎあげ、同時に、革命的左翼の諸分派（トロツキスト同志会、革共同西分派、共産主義者同盟）との闘争において、もっとも革命的なそれゆえにもっとも理論的一貫性をもった部隊として終始したのであった。そして、このような、先駆的運動を基礎に、西分派との綱領的闘争をつうじて確立されたわが同盟（革共同）全国委員会は、新安保条約をめぐる階級闘争の激化のなかで、慎重かつ印象ぶかく戦列の最前線に登場しつつ、その政治的経験を磨きあげ、組織的力量をゆたかにし、革命的プロレタリア党への道を全力をあげて前進したのであった（『逆流に抗して』参照）。

一年有半の安保闘争、とりわけ三度にわたる政治ストを展開した六月闘争のなかで、わが革命的労働者が示した不屈の闘志と巧妙な組織力にたいして、われわれは、それをなによりも貴重なものとして確認しなければならないのである。わが同盟の精華である革命的労働者のこうした闘争、あらたにわが戦列に参加しつつある革命的労働者のこうした経験は、わが同盟全国委員会のプロレタリア的特性をいっそう鮮明にし、同時に、その中央指導部の理論的政治的指導力の強化とそれを可能にする、組織体制の新しい情勢に対応した確立を不可避なものとしているのである。そして、こうしたわが同盟全国委員会の思想的・政治的・組織的に統一された前進のみが、共産主義者同盟の解体的危機に表象される革命的左翼運動のあらたな再編の展開を、革命的マルクス主義の勝利にむかってみちびきうるのである。いまや、わが革命的共産主義運動は、安保闘争におけるプロレタリア運動の挫折と敗北、池田内閣の成立、三池闘争の敗退という新しい情勢の展開に対応しつつ、ここ一年半の革命的左翼の活動と組織戦術にかんする徹底的な総括に立脚し、その前進の展望を明確にうちだすべき重大な時点にたっているのである。敗北からよく学びうるもののみが、勝利の道をよく照らしうるのである。

革命的学生運動と全国委員会

このような革命的共産主義運動の前進は、同時に、全学連と革命的学生運動に「寄生」し、その大衆的声望にのぼせあがった小ブル的急進主義者―共産主義者同盟学連派との闘争を不可避とするのである。革命的労働者から共産主義者同盟になげかけられた深刻な批判からなにひとつ学ぼうともせず、それどころか逆に、こうした批判に対応した内部批判にたいして、ただ「右翼日和見主義」のレッテル貼りしかしえないところの、この現代の「革命の錬金術師」たちは、「むかしの錬金技師の固定観念のなかにあった思想的混乱と偏狭性をわかちもつ」ことによって「革命的奇跡をおこなうはずの考案に没頭」し、「現存政府の倒壊という手じかな目的以外には他のなんの目的ももたない」のである（マルクス『フランスの陰謀家とスパイ』参照）。政治的ボヘミアンたるかれら小ブル急進主義者たちの性格は、偏狭、自己過信、無節操、そして放ろうである。

たとえば、こんにち、全学連執行部を掌握している共産主義者同盟の諸君は、七月はじめには安保闘争を「ブルジョアジーにたいする政治的勝利」と評価し、マルクス主義学生同盟の諸君にたい

して「敗北など口にするのは敗北主義だ」と恫喝したにもかかわらず、九月はじめには、はやくも「勝利と総括したのは、過大評価であった」（全学連第二五回中央委員会報告）などと奇妙な自己批判をやってのけるのである。もちろん、かれらは、こうした変化について「情勢の発展が総括を豊富にし深化させたのだ」というであろう。だがこのような言訳は、かれらが、七月には安保闘争に有頂天になった大衆の熱気、九月には三池闘争の裏切られた挫折―敗退による大衆の敗北感を、素直に表現する大衆政治家でしかないことの、自己証左である。かくしてわが小ブル急進主義者は、時期はずれの「挫折感」に焦燥を覚えつつ、「最後のブルジョア政策」池田内閣にむかって「最後の突撃」をいどもうとしている。

全学連指導部の「姫岡理論」と「東大意見書」の分裂に表象される小ブル的急進主義者の分解と没落の過程は、まさに、安保闘争の高揚と挫折―敗北からみちびかれた偉大な教訓の現実化である。なぜなら、四月―六月の政治的激動は、民同と日共の日和見主義を根底的に露呈させたばかりでなく、同時に、全学連の革命的学生運動に依拠し、ただそれに依拠することによって大衆運動の「左翼化」を意図したところの共産主義者同盟の小ブル急進主義的実態を暴露し、その解体の危機と没落を必然化したのである。共産主義者同盟の弔鐘は、かくてなりわたる！

小ブル急進主義との決別

われわれは、いまや、首都のわが革命的学生諸君の闘争を中心に、全学連指導部の小ブル急進主義にたいして断固とした闘争宣言を発しなければならない。こうした傾向を克服し、その頑固な信徒に別れを告げることなしには、わが革命的共産主義運動の前進は、けっしてありえないであろう。このようなわれわれの立場は、直接に大衆運動の分裂を意味するものではけっしてない。いなむしろ、こんにちでも革命的学生の多数が小ブル急進主義の規範のもとにあり、戦闘的労働者の多くが、革命的学生運動への同情と小ブル急進主義者への支持を混同している状況のもとにあっては学生戦線におけるわが革命的共産主義者の任務は、自己の組織的独立と理論的立脚点を確固として堅持し全学連指導部にたいするわれわれの批判を公然と大衆のまえに提示しつつ、もっとも戦闘的な戦士として革命的学生運動の先頭にたってたたかい、そして、こうした闘争をつうじて革命的学生と戦闘的労働者を小ブル急進主義の桎梏から解放し、革命的マルクス主義の旗のもとに結集することでなければならない。

われわれのこのような断固とした小ブル急進主義者との闘争の展開は、かならずや、一方の極点に単純実践主義者を硬直させていくと同時に、他方の極点に、こうした状況に批判的な革命的マルクス主義者をつぎつぎと結晶させていくであろう。そして、こうした両極分解の進行は、逆に、わが同盟全国委員会の強化を絶対的任務とするばかりか、その革命的脱皮すら不可避とするであろ

う。

いまや、わが革命的共産主義運動は、五八年秋をはるかに上まわる新しい再編の時期をむかえようとしているのである。ブルジョアジーの衆望を担って登場した池田新内閣は、三池の激突の「調停者」としてみごとにその任をはたすことによって、新安保条約の強行成立をめぐる政治的激動の最後の波をブルジョア的に収束し、政治的安定を回復するという支配階級の最初の任務を成功させたのである。

こうした政治的安定を基礎に一気に十一月総選挙に勝利したうえで、池田内閣は、治安体制を強化しつつ、大胆な財政投融資をテコに日本資本主義の飛躍的発展をかちとり、そのための徹底的合理化と教育のブルジョア的改革を強行しようとするであろう。われわれ革命的共産主義者は、こうした新情勢に対処し、ただちに反撃の準備にとりかからなくてはならない。九・七文部省抗議、九・一五首相官邸デモを突破口に展開される街頭デモンストレーションを基軸に、池田内閣の反労働者的攻撃の焦点と全体的姿を明白にプロレタリアートに説明し、暴露し、全戦線における個別的闘争を池田内閣打倒の一大契機としなければならない。こうした任務を真に革命的に遂行するためには、こんにちのわれわれの力は、いまだにあまりにも微弱である。だが、既成の「左翼」指導部から急速に分離しつつある革命的労働者の補強によって、このような状況を止揚すべき実体的根拠が獲得されるべき日は、いまや近づきつつあるのである。

（『前進』一五号　一九六〇年九月一五日　に掲載）

五　すべての革命的共産主義者は革共同全国委員会に結集せよ

六一年三月に執筆された本論文は、「革命的」戦旗派の組織戦術のまったき欠如によって、当初企図されたわが同盟との「合同」が完全に挫折した時点にあって、すべての革命的共産主義者にわが同盟への結集を訴え、六〇年ブントの革命的翼との革命的統一の根本的な立場を宣言した記念碑的論文である。

三月中旬におこなわれた戦旗派の全国細胞代表者会議は、いわゆる「革命的戦旗派」指導部の完全なイニシアティヴのもとに召集され、運営されたにもかかわらず、逆に、その指導性の衰退と破産を自己暴露したのであった。いなむしろ、破産した共産主義者同盟を革命的に解体し、革命的マルクス主義の旗のもとに再組織していくための闘争において、その決定的な桎梏がほかならぬ「革

命的戦旗派」指導部にこそきわめて集約的に内在していたことを明白に再確認させずにはおかなかったのである。同時にそれは、先月中旬の戦旗派中央の「統一」決議以来の「革命的戦旗派」指導部の約一カ月にわたる組織活動とその「立脚点」の非組織性と自己欺瞞が、地方からの代表によって徹底的に切開され、打倒される過程でもあったのである。

こんにち、すでに、こうした危機を打開し、克服するための苦闘が、革命的戦旗派の内部で力強く胎動しはじめている。われわれは、こうした胎動を革命的プロレタリア党のための闘争の決定的契機に転化させるために、(1)戦旗派の「統一」決議が共産主義者同盟の解体過程に投じた影響を検討し、(2)革命的戦旗派指導部の「自己否定＝立脚点」の自己欺瞞と組織戦術の欠如とその破産を無慈悲に暴露し、(3)緊急の組織問題についてのわれわれの立場をあきらかにしなければならない。

戦旗派中央が二月中旬に、全国委員会との「原則的統一を部分的保留を除いて決意し、決定した」（『戦旗』五一号）という事実は、あきらかに、破産した共産主義者同盟の解体過程にきわめて決定的な影響をなげかけずにはおかなかった。なぜなら、破産した共産主義者同盟の解体＝没落過程の「苦悩の表現」としての分派闘争の革命的止揚は、ただ、わが全国委員会との「原則的統一」によってのみ根底的に可能であることを、この「決議」は、不十分な規定性においてではあったが、無視しえぬ重みをかけて提出したからである。

この第一の影響は、二月下旬におこなわれた共産主義者同盟労働者細胞代表者会議の流産としてあらわれた。この労細代は、いくつかの傾向をもった諸分派（戦旗派をのぞく）の共同の発意のもとに「春闘の方針を検討しあわせてブント再建の方向を明らかにする」ために召集されたのであった。だが、一定の指導的分派も指導的理論もなしに召集されたこの会議は、一部に存在した「真正ブント再建」の思惑とまったく反対に、内部分解と腐敗を赤裸々に暴露し、「烏合の衆」としての実体を自己確認するだけに終ったのである。しかも戦旗派を会場から閉めだすことによって、こうした破産を「反省」すべき契機すらみずから切断したのであった。

こうした状況のなかで、共産主義者同盟関西派（山本久男）を中心に「自己破産」のうえにアグラをかきながら破廉恥にもいまふたたびわが全国委員会にたいする事実無根の誹謗をおこない、無意味な批判をなげかけることによって、自己の組織をセクト主義的に防衛しようとする「空しい努力」が、第二の影響として生まれつつある。（われわれは、わが関西ブントが勇敢にも「全国委員会批判」に着手しようとしていることを歓迎する。成文を読んだうえで必要とあらば反論することにして、ここでは、かれらのスターリン主義のとらえ方が、革共同西分派への心情的反発にもかかわらず、西分派ときわめて決定的な近似値をもっていることを指摘するにとどめたい。なお、われわれが「一律＋α」という賃金要求をもっているとの「批判」は、山本君の読解力を自己暴露するだけなので一言。）

第三の影響は、右のような新しい反動的試みにもかかわらず、真正ブントの拠点であったプロ通派の分解と事実上の解体として結果したのである。すなわち、プロ通派のカメレオン的「理論」家＝姫岡玲治君の自己欺瞞とその破産は、いまやプロ通派の六カ月の「実践」にふまえてその内部からすら摘出されるにいたったのである。わがプロ通派の諸君は、決定的にわが全国委員会と敵対することによって、逆にその没落をはやめ、共産主義者同盟の破産の追体験的構成を喜劇的に演じた

のである。そして、その少なからぬ活動家が戦線から離脱していく状況すら生みだし、スターリン主義者の攻撃のまえに全学連を無防備で放置する危険が時々刻々と拡大されつつあるのである。

このような共産主義者同盟の全面的崩壊は、その破産の現象的実現としての分解からの不可避的な結果であることはいうまでもないのである。だがわれわれは、西分派の諸君のように、「中間主義の没落」として喜んでいるべきであろうか。否！　けっしてそうであってはならない。なぜなら破産した共産主義者同盟の「非革命的」解体過程としての「全面的崩壊」状況の深刻化は、同時に、革命的左翼戦線の危機として、それゆえに、われわれの危機としてとらえかえされなければならないからである。そして、まさにこうした自己の危機に無自覚に「自己否定」をステロ・タイプ化し、いわゆる「立脚点」に自己陶酔したところに、「革命的戦旗派」指導部の陥穽があったのである。

「革命的」戦旗派の深刻な誤謬

すでにかんたんにみてきたように、二月中旬の戦旗派中央の「統一」決議は、破産した共産主義者同盟の解体過程としての分派闘争を革命的に止揚すべき契機として重大な意義をもっていた。まさにそれは、革命的共産主義運動の新しい段階を約束するものであった。

だが、過去の戦旗派と決定的に決別した革命的「立脚点」を獲得したはずの「革命的戦旗派」指導部は、破産した共産主義者同盟を「いかに」解体するかという組織戦術を欠如し、現実の階級闘争から昇天しつつ、こうした「立脚点」をふりまわすことによって、われわれの立脚点とは似て非

なるものへと変質していったのである。かくしてかれらは、「動力をもった立脚点」などという「哲学的」常套語で自己欺瞞的に粉飾することによって、自己の組織戦術の欠如を合理化しようとしたのである。

戦旗派全国細胞代表者会議の前日にいたるまで、われわれと「革命的戦旗派」指導部（同志西原をのぞく）とのあいだに後述の諸点をめぐってきわめて深刻な対立が存在したこと、そして、いくたびか決裂を決意せざるをえなかったことをここに記録しておく必要があると考える。そして、こうした事態をもたらしたもっとも決定的な原因は、同志青山に代表される一知半解の「立脚点」の自己絶対化であったのである。

「青山論文」と同志青山に内在し、その後の組織活動のなかで全面的に開花した「革命的戦旗派」指導部の基本的謬点は、およそ次のとおりであった――。

第一には、自己批判が外在的であることである。たとえば、「青山論文」の場合、共産主義者同盟の批判はあっても、ほかならぬ自己の問題としての反省が欠如している。しかも「哲学」的概念の操作に自己欺瞞的にスリカエる傾向がある。第二には、破産した共産主義者同盟を「いかに」解体するかという組織戦術の欠如である。それゆえ、実現さるべき同盟についての展望の欠如として反映する。第三には、「立脚点」「プロレタリア的主体の形成」の自己絶対化である。したがって、党を「いかに」創るのか、党は「いかに」活動すべきか、という問題は、すべて彼岸のものになってしまう。そして第四には、以上の総体的結果としての大衆運動からの召還主義、春闘や学生運動の危機にかんする無感覚の自己合理化として現象する。

革命的ケルンの創成、大胆な統一戦線の組織化を！

われわれは、破産した共産主義者同盟を革命的に解体し、同時に、こうした解体過程を実現さるべき革命的同盟の実現過程として遂行していくために、まずもって、共産主義者同盟の内部で革命的転化をめざし苦闘しつつある同志諸君を、こうした「革命的戦旗派」指導部の深刻な誤謬から解放するためにたたかわなくてはならない。

われわれはただちに、解体しつつある共産主義者同盟の諸潮流の内部に確固とした「革命的ケルン」を組織するための仕事にとりかからなくてはならない。この「革命的ケルン」は、破産した共産主義者同盟の革命的解体の主体的契機としてたたかうことによって、逆に、自己を実現さるべき同盟の実体として形成していかねばならないであろう。そしてまた、いっさいの革命的分子を大胆にマル青労同、ならびにマル学同に組織するための綿密な準備をおこないつつ、ただちに着手する必要がある。

右の仕事をすすめるに際して、われわれは、いっさいの妥協を排し、きわめて原則的に行動しなければならない。党の問題にかんして、われわれは、なにひとつとして譲ってはならない。だが、革命的共産主義者は、どんな問題でも「絶対に妥協してはいけない」のだろうか。否！　われわれは、全学連の革命的防衛のために、そして学生運動の革命的再建のために、大胆に統一戦線戦術を適用しなければならないのである。

革共同西分派の諸君は、全自連との統一を実現せよ！　という中間主義的意見を公然と大衆のまえで語りはじめている。旧ブント諸君の多くがこういう意見にたいしてあいまいな態度をとっていることは、きわめて不可解である。全自連＝スターリン主義者にたいして、断固とした反撃を開始せよ！　そのためにこそ、われわれは、可能なかぎりの部隊を結集して、スターリン主義者の攻撃から全学連を防衛するために、全力をつくしてたちあがらねばならない。

すべての革命的共産主義者は
反帝・反スターリン主義の旗のもと
革共同全国委員会に結集せよ！

（『前進』二六号　一九六一年三月二五日　に掲載）